BROADCASTING CREATORS' ASSOCIATION OF JAPAN

放送人の会

No・45
2010・3.19

〒102－0094　千代田区紀尾井町1－1　千代田放送会館　3階
TEL&fax　03－3221－0019　E-mail info@hosojin.com
代表幹事　今野勉　　編集担当　伊藤雅浩、鈴木典之、松尾羊一　　事務局　佐藤真美子

過剰報道と記憶崩壊

代表幹事　今野　勉

3月5日、「放送人の証言」が、放送文化基金の助成・援助金を受けることになって、その贈呈式に出席した折、技術開発部門で助成・援助を受けるテーマの中に「情報過剰表示による記憶崩壊メカニズムの解明」というタイトルを発見し、ちょっと刺戟を受けて、贈呈式のあとの懇親会の席で、申請者のMさんに話を伺った。

Mさんは、愛知県にある「自然科学機構」の「生理学研究所」の研究員である。Mさんが申請したテーマは、画面上に記号を次々と表示していき、その数（情報の数）とそれを記憶する（あるいはしない）メカニズムを解明するという基礎的な研究である。

話を聞いているうちに、私の頭の中には、画面表示という枠が取り払われて、過剰情報と記憶崩壊というシンプルな命題が浮かんできてしまった。ふつう、過剰情報と記憶のメカニズムといえば、受容限界だの受容拒否だのという言葉が想起されるが、Mさんの場合は、記憶崩壊である。記憶崩壊―何ともインパクトの強い言葉ではないか。

記憶崩壊とはいかなるものなのか、Mさんも助成金でこれから研究するわけだから、未解明なのは当然だが、記憶崩壊という言葉を使っている以上、仮説として想定されているということだった。

私たち制作者は、いつでも、自分が作り出す情報は、人間のため、社会のために役立つと信じて発信している（中には悪意に根ざす情報もあるだろうがそれは今は措いておく）。どんなに善意による情報であろうと、それが過剰になったとき、人間の個人のレベルで、あるいは社会的レベルで、記憶崩壊が起こる。発信者の誰が悪いというわけではなく、善意の情報の総量が人間や社会の記憶を崩壊させるとすれば、情報化社会の尖兵である私たちは、なんと罪深いことか―などと、Mさんに会ってから私はうだうだと考え続けていたのだが、1週間ほど経った時、読売新聞の橋本五郎さんのコラムの中にこんな言葉に出会った。政治家・大平正芳の言葉であるという。

＜権力はそれが奉仕する目的に必要な限り、その存在が許されるものであり、その目的に必要な限度において許されるものである＞

権力を求める政治家は、権力の行使において謙虚で抑制的でなければならない、という大平正芳の考え方を示した文章である。

＜許される存在＞という言葉が、20年以上前に私が書いたある戯曲を思い起こさせた。秋田の民謡歌手佐藤貞子の物語である。彼女は若い時から歌や踊りが図抜けてうまく、農作業をせずに近隣の村々に年中呼ばれて芸を披露して暮らせるようになった。

彼女は、芸で身を立てることを許される存在になったのだ。それが東北地方におけるはじめての職業的芸能人の誕生であった。

＜許される存在としての芸能人＞大平正芳はそれを＜許される存在としての権力者＞と置きかえて言ったともいえる。

そしてその物言いは、我が身に返ってくる。権力を、情報、と入れ替えてみる。

＜情報はそれが奉仕する目的に必要な限り、その存在が許されるものであり、その目的に必要な限度において許されるものである＞

過剰情報社会での情報発信者のありようは、かく謙虚で抑制的でなければならないのだろう。Mさんにあってから2週間後の私である。

放送人の会第13回総会・
放送人グランプリ2010贈賞式

日時・2010年5月15日（土）
　　午後2時～6時30分
場所・NHK青山荘　1階欅ホール
会費・4、000円
　　（会場費と懇親会参加費）
4時から贈賞式、5時過ぎから懇親会の予定
★役員改選のための推薦投票は4月5日までにお送りください

放送人の世界（第12回）
『テレビの青春』と今野勉
日時・3月20日（土）27日（土）
　　4月3日（土）
場所・横浜情文センター7階会議室
ゲスト・今野勉

「放送人グランプリ」間もなく締め切り
～会員のこころのアーカイブに期待～

堀川とんこう

放送人グランプリも今年で9回目になる。2002年に村木良彦さんを中心とする会員の熱意で発足して、以来賞の主旨も意味も変わりはないが、賞をめぐる環境に大きな変化があった。デジタル化の影響は想像以上に広範囲に及んでいるし、多メディア化にも拍車がかかってテレビのメディア価値はますます相対化した。

そこへ世界同時不況の大波である。制作の現場では前にも増して視聴率と制作費の問題が重圧となっているに違いない。一方で、数本の豪華番組に巨費を投じてチャンネルの存在感を強調しようというカンフル番組が作られるので、通常の番組は予算の削減など一層冷たい風にさらされる。

となると、制作者たちの意識や姿勢にも変化は起こるだろう。テレビは不可逆的に変質をしたのだからこの条件を受け入れて作るしかないだろう、と。

賞の選考にも影響はあるかもしれない。「よくここまでやった、というべきじゃないか」「こういうものを拾っていかないと、ないよ」「なんとか活路を開こうという姿勢は見えるんじゃないか」

更に、奇跡的に現れた良品に対して、「こういう例外的なものを褒め過ぎると、テレビの現実から浮くよ」「ならばバランスをとって、これも入れようよ」と。

昨年度の文化庁の芸術祭の選考はブレなかったなと思う。NHK広島の「火の魚」がドラマ部門の1位になり、ドキュメンタリー代表をも破って大賞にした。よくぞ選んだ、選考委員は勇気あるなあ、であった。

「火の魚」は、室生犀星の短編小説を大胆にテレビ脚本にした間違いのない良品だった。脚本（渡辺あや）がいい、役者（原田芳雄、尾野真千子）がいい、演出（黒崎博）がいい。小粒ながら宝石のようにキラキラ光る逸品だ。だが、これが制作されたのは奇跡みたいなものだろう。民放はおろか、NHK東京でもできないだろう。少しオールドファッションだし、分かり易い内容でもない。このドラマの緊張感を楽しむためには多少の教養も必要だ。しかし久しぶりに出会う、いっそ懐かしい質感だった。テレビドラマは一度はこの辺まで行ってたよな。そのことをこの頃すっかり忘れてたな、という感慨があった。

確かにこれを民放のゴールデンタイムに出したら浮くだろう。視聴率も取れないだろう。こういうものを作れる機会が皆にあるわけでもない。しかし「火の魚」は作られた。私はたまたま別の選考の場で推薦し、総見ということになったが、いいものを見せてもらったと感謝された。

テレビ番組の制作環境が悪化すると評価の基準も動きがちだ。無い物ねだりをしても仕方がないという気にもなる。

しかし、テレビが一度は獲得した質的な領域を諦めて捨て去ってはいけないと思う。幸い「放送人の会」にはテレビの到達した地点を確認する催しがいくつもある。会員の心の中のアーカイブには、テレビの質的な基準が大切に保存されているに違いない。懐古趣味といわれるのを恐れず、それを大切にし、言葉化する努力をしたい。「放送人の会」には、ブレない基準を維持する役割があるのではないか。

会員各位の推薦に期待したい。

「放送人グランプリ」下馬評座談会

X　この座談会は会報を読んだ会員が放送人グランプリを考える手がかりになれば、と企画したもので、評論ではなく、こんな番組があった、こんな面白いことがあった、とどんどん事柄、ケースを出して頂きたい。

《はじめに》

Y　この1年の最重要の事柄は政権交代だが、それに関する目だった番組、報道は？

Z　NHKがやった「永田町権力の攻防」があるが、民放は夜のワイドの中で処理した。

X　「永田町権力…」はこの10年、日本の政治は小沢を中心に回ってきたということを3回シリーズであぶり出した。犯人は小沢だと、あれだけ強烈に描いたものはない。

Y　新政権への期待が語られると同時に小沢、鳩山のお金の問題が出てきた。

Z　それを含めて小沢なのだ。

X　政権発足後しばらく、「新政権を採点する」という番組で橋元大阪府知事が「100点」と言ったのは凄く印象的だった。事業仕分けが終わった直後だ。

Y　最近、連休をずらす話が出ている。するとマスコミは一斉にその話ばっかりだ。地図をでかく使ってメリット、デメリットと声高にやっている。それは金銭以外の話題がでて来たことにマスコミがやれやれと安堵した感じがする。マスコミの操作は少しでも明るい話題を提供することで問題をそらすことなのかもしれない。連休の話は民主党が意識して出してきたとは思わないが…

Z　政権交代で新しい政治手法が期待されたのだが、蓋を開けてみたらやはり小沢の手法で、がっかりという状況だ。一方マスコミは政治取材の方法が全く変わっていない。過去の瑣末な金銭を問題にし、「コンクリートから人へ」の政策の議論を深めようとしない。つまり何も変わっていない。期待していた国民は離れる。

X　記者クラブ制度は掟を守らない奴は村八分にする制度で、政治家のほうを向いている姿勢から身動きはとれない。

Ｙ　新聞の悪しき伝統だが「取材すれど書かず」という記者を偉い記者として奉る。記者は個々の政治家とつながり、政治ゴロとしてのし上がって行く。この形は変わっていない。民主党は原口、枝野など大臣がオープン取材に応じるようになった。マスコミはこれに注目し支持しなければならない。これを無視して旧態依然の意識に縛られている。

Ｚ　「仕分け」は絶好の映像ネタだった。国会中継はＮＨＫの義務らしいが、「仕分け」はその中継を放送としてどう位置づけるか迷っているうちに終わってしまった。あれは初めからずっとやっていたら実に面白かったろうと思う。

Ｘ　量的にはかなりやっていた。それより、政権交代をテレビ画面で感じさせたのは解説する記者が変わったことだ。ベテラン記者、官邸記者など何種類かある記者の棲み分けが変わった。取材方法は変わっていないようだ。

Ｚ　どんなつもりだったかわからないが、市民運動家、社会運動家の湯浅誠を内閣参与に入れたことはここ半年の中の画期的な事柄だったと思う。それでテレビが二つの番組を作ったことはそれなりに評価する。（ＮスペとＮＮＮドキュメント）

Ｘ　ＮＨＫはＣＰが角英夫。ディレクターが女性。

Ｙ　湯浅誠を起用してあんなポジションに置くという政治はこれまでなかった。

Ｚ　二つの番組は官僚との葛藤を見事に検証した。Ｎスペの編集をやったのは北森というベテランで、２５０時間の取材テープを全部見ると湯浅誠は決して協調的な体制手腕かではない。交渉ごともいろいろ折れた上で戦略家として鳩山、官の力をうまく利用して[illegible]する。今までの日本の知性になかったタイプかもしれない。たいていのドキュメンタリーはどんな感動作品でもラッシュを全部見るとどこかにホンネがポロリと漏れておかしなところがあるものだ。ところが湯浅の２５０時間にはない。

彼を政権内部に取り込んだのは素晴らしいが、彼が出て行かざるを得なかったのは情けない。官僚制批判の公約はこれでは全くはたせない。

Ｘ　彼と一緒にやっていた政務官が官僚に対して全く力がない。結局全部湯浅に頼って、湯浅は官僚説得に全力を尽くす。決して怒らず、丹念に説得を続け結局止めるときに「こんなものか」と捨て台詞を残す。

Ｙ　彼は決して官僚の悪口を言わない。官僚は権限や目的によってこれまでのビヘビアーをくずさない。それを崩すのは世論そのものだ、と言ってやめる。止めて社会運動の現場へ戻って行く。イデオロギッシュで反体制的でかっこいい知性はこれまで何人もいた。しかしあれだけ実務能力があり、自分の体を動かし、実現のため努力した知性はない。

Ｙ　ネットカフェ難民の最初のころから彼はいた。ＮＴＶ水島の友達みたいな人だ。ＮＰＯ法人はいくつかあるのだが、お互いに連携をとっていない。施策として何とかならないかと動いたのは湯浅だけで孤立した。他はみんな小さなグループだから現場の面倒見で手一杯だった。

Ｚ　湯浅誠、東大法学部大学院卒、４０歳。働き盛りだ。

Ｘ　事業仕分けも、民間からの人材の起用も民主党はこれからもやると言っている。

Ｙ　事業仕分けは政治手法として斬新で共感を呼ぶ唯一の方法だ。あれを続けるしか民主党が生きる道はない。

《テレビドラマ》

Ｙ　民放の連ドラ・レースではラブ・ストーリーものＦ１路線が低迷し、ガキ向けナンセンス学園ものやドンパチ・アクションものばかり目立つが。

Ｚ　大作主義の傾向に注目したい。ＮＨＫの「白洲次郎」「坂の上の雲」「不毛地帯」のいい意味での試行錯誤的作品に一票入れたい。

Ｙ　どっちも新聞記者が描けていないと某紙の記者が怒っていた（笑い）分かりやす過ぎるのが問題だと。

Ｘ　新聞記者ついでにといってはナンだが、読売の鈴木嘉一の連載コラム「山田太一論」やその他、独特の批評軸からの作品や放送界への論説は注目に値すると思うのだが。

Ｚ　テレビ朝日の五十嵐文郎。柔軟な編成ポリシーに乗せ、いわゆるプロダクション・タレントを横目に「点と線」をはじめ話題作路線を堅持する。

Ｚ　大河枠だけど、従来のＮＨＫ時代劇や歴史劇とは大きく違う演出の「竜馬伝」（大森啓史ほかスタッフ）。香川照之と吉田東洋の田中泯。

Ｙ　それとは逆に深夜枠での小品群が今面白い。例えばマルチ作家大宮エリーの「木下部長とボク」。彼女は「サラリーマンＮＥＯ」（ＮＨＫ）をさらにラジカルに戯画化している。

小林薫の「深夜食堂」（毎日放送）も。新宿裏町を舞台に、小劇場風な作り。

Ｙ　「ＪＩＮ―仁」のＰ、石丸彰彦。

Ｘ　石丸は八木康夫の次の世代だが、「ＲＯＯＫＩＥＳ」の熱っぽさだけじゃない。「仁」は医療ものドラマなどで集中手術室の段取りを知っている視聴者にとって頭蓋骨にトンカチで穴をあけるシーンなどは、二重写しの面白さがあり、「未来を思い出す」過去の現在的心情や設定にドラマの斬新さがあった。

Ｚ　「アイシテル～海容」の次屋尚。最近子殺し事件が多い。安易な社会派ドラマでなく、あえてホームドラマの視点から若い主婦に訴える姿勢だ。

Ｘ　海容というのは殺人を犯した少年と家族を被害者一家が許すという意味らしい。タブーの領域に迫った企画の勇気を買う。

Ｙ　岡崎栄の旺盛な制作意欲を買いたい。すべて自作の脚本で臨む。まず「遥かなる絆」だが、ある意味で「大地の子」の続編だ。日本で苦労した残留孤児を父に持った娘（鈴木杏）の目から綴った日中問題の背景を描く。

Ｚ　ついで娘をガンで失った当事者児玉清の司会で職場や家族の間で苦しみ、救われた体験者の証言をテーマに進めた「働きざかりのガン」さらにドキュメンタリー番組で業績を残した向井爽さんと同じくガンに犯された妻の闘病日誌をもとに繰り広げられる命の人間賛歌「二本の木」。

Ｙ　というより、病ものを超えた映像による文学性の奥行きをもった作品になっている。お互いに確実に死ぬと分かっている中でどれだけ時間を自分のものにしてゆくか。感動した。

Ｘ　ＮＨＫの連続ドラマは振幅が激しい

が「再生の町」を買う。政権交代の直後でもあり、夕張並みに財政逼迫の大阪の小都市を舞台に、銀行員から転職した公務員の奮闘を正義派ぶった社会派ドラマじゃなく、事業仕分けみたいな、いわば〝調査ドラマ〟風に核心に迫る。制作は青木信也。

Ｙいきなり芸術祭大賞を獲た広島発ドラマ「火の魚」の黒崎博。河瀬直美が育てた尾野真千子の演技がいい。

《ドキュメンタリー》

Ｘ　一般論だが、歳を取るとドキュメンタリー愛好家が増える（笑い）。激戦区分野だから話題番組を列挙してみよう。

Ｚ　ＮＨＫには生活、文化、民俗を記録する流れがあった。あれが今はＮスペの中にもほとんどない。

Ｘ「四万十川」「永平寺」などの流れだ。

Ｙ　ＮＨＫ報道局の中には「新日本紀行」班のように全国を旅してローカルの新人ディレクターと一緒にやるもの、教養班の中のチームなどがあったが今はない。

Ｚ　あの大きな組織の大きな会議では自己主張はなかなかできない。

Ｘ　ＮＨＫのローカルのデータは今中央に集まっていない。地方で放送されてそのまま放置されるが、かろうじて「地方の時代映像祭」がすくいあげている。あの大半はＮＨＫの地方局でしか放送していない。ＮＨＫ中央にはデータがないので横浜の放送文化センターで集めようとすると非常に難しい。

　注意して見ていると地方の風土記的なものがときにまとめて東京で放送されているが、あとはノータッチだ。

Ｙ　宮本常一を読むと、彼はある種のカメラマンでもあって、時代と風俗、民間伝承を追っていくが、その中で一言も「貧しさ」と言わない。米の話、ミカンの話など、地域ごと、徳島のミカンと松山のミカンはどう違うか、先代から次の世代へどう伝わったかなどを詳細に述べるうちに農村の社会、経済の仕組みが浮かび上がってくる。

Ｚ　秋山豊寛が何故農民になったかは興味のあるところだが、都会でヤクザな仕事をしてきた人間が自然を相手にまっとうな仕事をしたい、という美意識があったのではないか。

　「日本縦断」、「新日本紀行」をやっていたとき宮本常一はネタ本の一つだった。流れ歩く流民の一人で、「遠くへ行きたい」もその系譜だろう。

Ｘ　先夜の「熱中時間」ではおばあさんが高齢になってジオラマを作る。農村の代掻きから田植えそして稲刈りし、脱穀し俵に詰めるまでの作業を丹念に小さな人形で作っている。他に養蚕の作業も作ってある。15分じゃ惜しい、もっと見たいと思った。あのおばあちゃんは凄い。

Ｙ　「ヤマノミ～奥アマゾン」は実に面白かった。賞を取りすぎるくらい取った。日本賞コンクールでも外国の審査員に最も高い評価を得た。

Ｚ　８ミリの時代にも他の世界から隔絶したところに長期滞在して取材することは行なわれていて、この作品はオーソドックスな作り方だ。「悲しき熱帯」、牛山純一の仕事にも共通するものがあり、年齢集団、出産など忌み嫌うものなど、人間の社会を描いて評価できるが賞を貰いすぎた。

Ｘ　１５０日部落のなかで全く部落の人と同じように暮らしに溶け込んで仕事する。彼らによれば「ヤノマミ」は上等で他の世界の人間は下等だ。その下等の地位に甘んじて取材を続ける。出産した子供を生かすか殺すか母親が決めるという生々しい場面はあるが、食とセックスの取材は足りない

Ｙ　撮ってはいるけど出さなかったのだろう。われわれの近代概念ではとうてい納得できない、原風景としての人類はほんとうにこんなものかと思うところまでの迫真力があった。ショックだった。

Ｚ　ＭＢＳの里見繁、今年残念ながら卒業になってしまうが、彼が作った「ＤＮＡ鑑定の呪縛」は足利事件で彼が釈放される前に「明らかに冤罪だ」という形で番組を作り、更に「逃げる司法」で同じようにＤＮＡ鑑定で問題になっている飯塚事件を追いかけている。里美はこれまで冤罪事件の番組しか作っていない。

　彼がずっとやってきた「布川事件」も冤罪の可能性が高くなってきた。放送局にいながら毎日法廷に通って事件を追ってきた。前に「日野事件」でギャラクシー賞を受賞している。

Ｘ　昨年は「彼女は嘘をついたのか」という痴漢冤罪を扱った。

Ｙ　毎日放送の「映像０９」でずっとやってきた。

Ｚ　里見はこつこつ法廷に通い、冤罪事件を判決が出る前にやるというスタイルは放送人として顕彰したい。

Ｘ　テレビ金沢の中崎清栄、元北陸放送でずっと無名の人々を撮り続けて、ＮＮＮドキュメントなどで放送したが、昨年は「笑って死ねる病院」、最後に患者の望みを叶える城北病院を描いた。

Ｙ　ギャラクシー賞奨励賞だ。「聞いてくたい」が選奨だ。こちらは御供田幸子さんという金沢の演芸おばちゃんを追いかけるのだが、そのうち御供田さんの会に来ている常連さんを追う。その向こう側に日本の高齢社会が見える。お芝居が終わっても常連さんは帰らない。早く帰ると嫁がいやがるからだ。あれを引き出したのは中崎の人柄だろう。５００円のお菓子を持って近所のおばちゃんを訪ねて四方山話をしているうちに番組ができてしまう。あんな、人から人へという番組の作り方、これは放送人として非常に面白いタイプだろう。

Ｚ　カメラマン出身の辻本昌平と組んだ仕事が多い。

Ｘ　ドキュメンタリストの多くは大学の教授になったりして番組を作り続けない。作り続けている石橋冠を堀川とんこうを見習えと言いたい。その点中崎は会社を変わっても作り続けていてえらい。

Ｙ　どうして会社を移ったの？

Ｚ　定年で、1年は引っ込んでいたけど、辻本くんを何とかどこかに入れようと奔走して、辻本がライバル局のテレビ金沢に入ることになったら、テレビ金沢の会長が「中崎さんも一緒に」と言って、またコンビを組むことになった。テレビ金沢は新しい局で、ドキュメンタリーの伝統がなく、これまでギャラクシー賞などの候補になったことがなかったが、彼女たちが行ってから毎年選奨以上をとっている。

Ｘ　3月20日夜9時、辻本脚本のドラマ番組「毎度２３８号」がＮＨＫから放送される。脚本は日本脚本家連盟の大賞を受賞した。

Ｙ　信越放送の手塚孝典の「少年たちは戦場へ送られた」がある。

Ｚ　昨年、手塚の「福太郎の家」に放送人の会は賞をさしあげた。

Ｘ　「福太郎…」はあれは町のみそっかすなんだ。ボランティアとかというのではなく町全体であの子を育てている。嫌われちゃいないが「どうも面倒のかかる子だ」とみんなで面倒をみている。

Ｙ　あれは続編を見たい。あの子は大きくなったかな？

Ｚ　親がどうしようもない親で、それが面白かった。実にユニークな作品だ。

Ｘ　南海放送の寺尾隆のお好み焼きの「昌万」ものは4作目。あれはもはや一種のドラマで登場人物を全部覚えた。あれは面白い。

Ｘ　寺尾隆は先ほど出たが、放送人の会としては初めてノミネートすることになる。彼の上司が大西康司、放送人の会会員で、この上司との連携プレーでやってきた。

Ｙ　「昌万」は定点観測の3作目だ。マルセーユものばかり書いた劇作家マルセル・パニョル風の視点で、漁師町の横丁のお好み焼き屋のおばちゃんの所へ集まる近所の常連のはなしだ。若い人はいなくて老人ばかり。そのじいさん、ばあさんのキャラが面白い。パニョルのファニーやセザールと似ている。

Ｚ　背負っている背景がそれぞれにユニークだ。定点観測のカメラは店の鴨居のあたりにある。それと手持ちのカメラと交互に使っている。

Ｙ　公害とか戦争とかきめつけず、なにげなくやる。昔佐藤真というフィルム系のドキュメンタリストが「阿賀野川に生きる」を撮った。河口近くに住み川魚を食べて暮らしている老夫婦の生活を淡々と描き、「今日は南風だから魚は獲れない」とかの日常を重ね、最後にイタイイタイ病が出てくる。それまでまったくカドミウムに触れないから逆に根が深い、何年も続いていることだと伝わる。彼は残念ながら自殺した。

Ｚ　フィルムドキュメントの世界とテレビドキュメントの世界は全く違う。佐藤真や羽仁進を頂点とし姫田正義など、山形映像祭はこのフィルムドキュメントを追い続けてきた。

Ｘ　加賀美幸子のアーカイブ番組は桜井洋子が今2代目を継いでいる。民放の午後はもっぱら再放送だが、アーカイブという思想はなかった。それと加賀美幸子は朗読を個人で積極的にやっているが、これは放送に直結する活動だろう。

Ｚ　味谷和哉の「ザ・ノンフィクション」枠（フジ）は1時間枠で、田舎から都会へ出てきて流れ流れて今はこんな暮らしといった風俗素材のドキュメントが多い。他の局はどんどん止めたのにフジテレビはよくこの番組をやっていると感心する。

Ｙ　日笠昭彦は「ＮＮＮドキュメント」の総括。今度この番組が40周年を迎える。このうち10年を彼がやり、約１０００本の番組をやった。正式社員ではなくて契約プロデューサーで、いろんな局を渡り歩いた末「ＮＮＮドキュメント」の専属Ｐとして契約した。系列の地方局のディレクターたちに聞くとみな「日笠さんにノウハウを教わった」と言う。非常に頼りにされている。ギャラクシー賞だけでみると、一昨年は10本、昨年は6本月間賞に入賞している。1年１２本だからこれは凄い打率だ。日笠さんほど系列の人に慕われている人はいない。

Ｚ　日曜の深夜午前1時からの３０分枠。作品はつぶが揃っている。

Ｙ　今中央には作った経験がないから、こんなことを仕切れる人間がいない。

Ｚ　「ネットカフェ難民」は最初ここでやって、あとでふくらませた。この枠で3回やっている。評判になって別の枠で特番になった。水島がＤで日笠がＣＰだ。

Ｘ　金沢の中崎清栄の番組を先日この枠で放送した。「笑って死ねる病院」の病院の患者で音楽葬をやりたいと言ってガンで亡くなった人の「歌うおくりびと」という番組だ。これも日笠さんが力を尽くして30分にまとめる手伝いをした。

《ラジオ》

Ｘ　子供にラジオの話をすると、ラジオってなんですか？（笑い）笑いごとじゃない。デジタル論議どころじゃない。

Ｚ　ケータイみたいな熱いニーズ感が今のラジオには全くない。

Ｙ　アナログラジオと引き換えにタダで配る覚悟がないとデジタルの市民権はありえない。

Ｘ　広域化する電波障害も深刻だ。

Ｚ　ラジオの経営者は誰も5年後、10年後を考えての対策、提言をしてこなかった。難聴問題だって20年も前から問題化していた。高層ビル、外国電波の混信、電子レンジなどの電子機器との混在など、受信環境の悪化を指摘するとメディア価値が下がる、経営の足を引っ張るとみんな及び腰になっていた。

Ｙ　そこで在京、在阪13社で「ＩＴサイマルラジオ協議会」を発足させ、インターネットで聴ける環境整備に躍起だ。

Ｚ　試験配信中だが「ＨＰに接続できない」「《混み合っています》って表示が出て聴こえない」とクレーム続出だが、とにかく8月に見切り発車する。

Ｘ　著作権などネック山積だが、ともかくネット搭載は多様化したテレビ受信やケータイに遅れをとったラジオ再生のきっかけにはなる。

Ｙ　それでも現場で活躍中のラジオ人や作品を挙げてみよう。

Ｚ　「風に刻む」という芸術祭ラジオ部門でグランプリを受賞した作品を聞いて欲しい。阪神淡路大震災の被災者同士の軋轢をドラマ化した作品でＮＨＫ大阪で放送、Ｄは東京の江沢俊彦、脚本家の芳崎洋子自身も被災体験を持つ関西の劇団関係者だ。笹野高史の偏屈な親父役が実にうまい。

Ｙ　心に残った作品では北日本放送の録音構成「もうひとつのおくりびと」。富山出身の原作者青木新門に焦点をあてたものだが、青木の語り口が抜群だ。孤独死した老人の遺体に蛆がわいて光ってみえる。「蛆は光だ」という言葉に重みがある。

（露木茂・書面参加）　ラジオは午後台がアツい。大竹まこと（ＱＲ）やテリー伊藤（ＬＦ）だが、何といっても小島慶子（ＴＢＳ）の「キラ☆キラ」だ。「アクセス」は終わるが、午後台での内輪話や社会問題にシモネタまで自分をさらけだし、挑発されてか、リスナーも本音でメールを送ってくる。

Ｘ　大沢悠里や遠藤泰子（ＴＢＳ）も実績のわりにあまり賞の対象になっていない。ＴＢＳついでだが、ネットラジオから導入した「ＯＴＴＡＶＡ　ＣＯＮ　Ｂ

ＲＩＯ」の斉藤茂。「気分がよくなる曲」のリクエストなんて遊びがユニークなクラシック音楽のシャレたバラエティー化で、マンネリ気味な「ラジオ深夜便」の客を剥ぎ取っているって噂だ。丑三つ時の3時に、だ（笑い）

Ｚ　パカパカ・オモシロの宮川賢の「パカパカ行進曲」とラジオ報道の武田一顕。政策と政局を同時進行で生々しく語れる人。ＴＢＳラジオの秘密兵器が頭角を表しはじめた。元北京特派員の中国通で、「ドキュメント政権交代～自民党崩壊への４００日」（河出書房）の著作がある。

Ｘ　ＴＢＳばかりだが、聴取率首位を続ける理由がわかるような気がする。

Ｙ　テレビは元気がないが（笑い）

Ｘ　元気があるのは地方のラジオだ。沖縄の上原直彦（放送人グランプリ受賞）の活躍もそうで、沖縄・北海道という〝内地離れ〟の地域局やコミュニティーラジオの動向に次世代ラジオのヒントがあるように思う。

Ｙ　総じてラジオ・キー局はウチ向きで、声が小さいのが気になる。パーソナリティーにオンブにだっこで局主体のエディターシップが不在なのだ。

《バラエティー・音楽・タレント》

Ｚ　「ちい散歩」（テレ朝）の地井武男。ひと駅間をそぞろ歩く。すれ違う乳母車親子や店屋に声をかけ、何もない住宅街でスタッフをからかう。これが今、評判。

Ｙ　「北の国から」の「中畑のおじさん」にこんな才能があるとは。自然体で釣瓶の「家族に乾杯」（ＮＨＫ）より買う。

Ｙ　新・都市伝説風なこだわりで都心の路地をさまよう「タモリ倶楽部」をまねた「ぶらタモリ」（ＮＨＫ）は終わった。

Ｙ　めぼしいものを挙げると、サイエンス・タレントの米村でんじろうとさかなクン。ドサ回り仕立ての歌謡番組司会の綾小路きみまろ。目下イラン疾走中のアース・マラソンの間寛平。ことばおじさんの梅津正樹など。

Ｚ　「こどもニュース」時代に味付けした時事解説バラエティー「学べるニュースショー」などで池上彰は各局に横断的に出演。朝日のコラムも鋭い。

（碓井広義・書面参加）　「のりゆきのトークＤＥ北海道」（北海道文化放送）は15年を越す長寿番組。これはテレビだが午前中の占拠率の高さ、道内で〝のりさん〟を知らぬ人はモグリといわれる元ＨＢＣ出身のラジオのノリで売るテレビ・パーソナリティーだ。

Ｘ　あまり賞の対象として語られない音楽分野では？

Ｚ　テレ朝の「ミュージック・ステーション」は長寿性を誇るスタンダードな作りだが、ここへきて「ＳＯＮＧＳ」（ＮＨＫ）に注目している。テレビの音楽番組に出ない、佐野元春、矢沢永吉、岡林信康、井上陽水などをドキュメンタリー・タッチで回想し、バービー・ボーイズや横浜のエキゾシズムを表現するクレージー・ケンバンドなどにも風俗史的な視線と目配りで描く。制作統括、三溝敬志だ。

Ｙ　フジの「ミュージック・フェア」のｐきくち伸。１社提供で音楽ジャーナルをバックにＪ・ＰＯＰを後押ししている。もっと評価していい。

《新人賞・奨励賞》

Ｘ　ＮＨＫ・ＥＴＶ特集の「死刑囚永山則夫―獄中28年間の対話」（10・11）だが、永山則夫は逮捕されたのが昭和4年、それから獄中に28年いて死刑執行された。１９９７年死刑という計算になる。それから１０年以上経ったわけだ。堀川惠子はテレビ広島からドキュメンタリージャパンに引き抜かれて活躍していろんな戦争ものを作ったが、それからＥＴＶ特集をやった。立場は外部の契約ディレクターだ。この作品は死刑制度と永山の死刑は相当かという重大な問題を提起している。今彼女は2弾目にとりかかっている。ＮＨＫの社員じゃないので驚いている。

Ｙ　永山は獄中結婚をしてそのご離婚した。当時、何故結婚したのか、売名行為ではないのかと疑問に思っていた。番組は永山の死刑後マスコミの前から姿を消していた奥さん、和美さんの独白がもとになっているが、この独白が凄い。一つのショットだが、人間が映像つきで喋っている説得力にはあらためて感嘆する。

Ｘ　裁判は1審で死刑だが、高裁で無期に変わる。それは奥さんの証言が高裁の3人の裁判官の心を揺さぶったからだ。検察は上告して最高裁で死刑が確定する。最初死刑を覚悟した永山は途中奥さんの愛を知って希望を持つ。永山は「オレは一度死ぬことを覚悟したが、法はオレに一度生きたいとおもわせた上で殺すのか」と言い、奥さんとも離婚する。離婚したけど奥さんは永山の遺灰を遺言に従って網走の海に撒く。永山は5歳から15歳まで青森で育つのだが、永山は5歳まで育った網走の海に撒いてくれと遺言した。いろいろと我々の心を揺さぶる情緒とすさまじい手紙のやり取りとで、ドｐキュメンタリーでは今年1番優れた作品ではないかと思った。

Ｙ　それでは永山を生かしておけばよかったのか、という結論は絶対に出てこない。

Ｘ　堀川惠子は最初「これは番組にならないだろう」と思った。それで本を書いた。日本評論社から出版されている。

Ｙ　永山の殺人は1度に何人も殺したのではない。1週間か１０日おきに自分と関係のないホテルの警備員とかタクシーの運転手とかを3人殺す。これを死刑にしなかったら、死刑になる人間はいない。しかし表現力と直観力に優れた永山の話と和美さんの話を聞いたら裁判官は参っただろう。

Ｚ　永山の「無知の涙」を読んだが人間の可能性の凄さに感嘆した。彼は牢獄に入ってから本を読み始め、資本論を全部実に丹念に読む。そして小説も書く。永山則夫全集3巻が出版されている。っ極限状況におかれた人間の表現能力に感動する。

Ｘ　行商だけで生きたお母さん、かつては美人だったろうと思うが、中年になってぼやーっと魂の抜けたような写真が出てくる。これを入れるタイミングがうまい。そして誰が録音したのか永山の肉声が残っている。

Ｙ　堀川惠子はテレビ広島では「チンチン電車と女学生」という戦争中女学生が市電を運転したドキュメントを作ってギャラクシー賞を受賞した。ドキュメンタリージャパンに移ってから、原爆で死んだ広島の劇団の女優さんの秘話を発掘したり、戦争ものをずいぶん作っている。「チンチン電車…」も本にして表彰された。

Ｘ　彼女は30何歳かで番組デスクにさせ

られて、現場を離れそうになってやめた。旦那がNHKの制作のプロデューサーで、公私ともにシゴかれているそうだ。

Y　旦那は繊細な男で、細川恵子は160センチを越えるもとアナウンサーのなかなかいい女だ。いい加減な男ではやられそうな鋭い感じがある。タレントとして、被写体としても面白い。

Z　右田千代の執念は凄い。Nスペ「日本海軍400時間の記録」は前にこの会報の9月号の座談会で話題にした。年齢は40代、他にもいろいろ作品がある。

Y　この番組は面白かった。記録に残る1級資料だ。

では今日はこんなところで。

《座談会》

開催日時・3月5日（金）
午後3時～7時
開催場所・放送人の会・事務局
出席者　石井彰、伊藤雅浩、河野尚行、鈴木典之、堀川とんこう、松尾羊一、＜書面参加＞
碓井広義、露木茂

第26回　**名作の舞台裏**
清座衛門残日録

日時・4月17日（土）
午後1時半～4時半
場所・横浜情文ホール
ゲスト・仲代達也（出演）かたせ梨乃（出演）竹山　洋（脚本）菅野高至（制作）
司会・堀川とんこう

第2回ドキュメンタリー・ワールド　テレビは激動する日本列島をどのように描いてきたか

日時・2010年2月13日（土）
午後1時半～5時半
会場・横浜情文センター7階会議室
ゲスト・森まゆみ（作家・「谷根千工房」代表）
水島久光（東海大学広報メディア学・BPO委員）
進行役・桜井均（NHK放研・会員）

久々の開講。亡くなった玉置宏さん風にいえば「1年間のご無沙汰でした」の講座は、前回を上回る聴衆の数と熱気を呼んだ。小雪まじりの氷雨の中、申込み者130人中90人を越す老若男女が参加、盛況を見越して用意した大会議室も満杯になった。京都から駆けつけた4人の大学生もいる。一昨年あたりから目立つドキュメンタリーへの関心の高さが、市民層に浸透している証拠で、立ち会った放送番組センターの工藤専務理事も「この地味な催しがねえ…」と驚くことしきりだった。

講座は、70年代高度成長期の日本の変貌ぶりを当時のドキュメント記録で追い、その意味を今の時点から検証してみようという〝アーカイブ視聴〟の試みで、企画・構成・進行は前回同様、会のドキュメンタリー研究会チーフの桜井均さん。70年封切の松竹映画「家族」（山田洋二監督、井川比佐志、倍賞千恵子、笠智衆他出演）の物語を〝幹〟に、炭鉱離職者一家が辿る九州から北海道までのロードムービー行程の要所要所で、NHKのドキュメンタリー番組映像を〝枝葉〟として挟み込む、〝樹木図〟的な分析手法が巧みに時代の全体像を浮かび上がらせて理解を助ける。

桜井　均さん

冒頭、序章風に部分上映したNスペ「日本リゾート列島」（90年）が、開発・人工化による国土破壊の無残さを空から見せるや、会場は一気に驚きの緊張感が走る。

桜井さんが徹夜を重ねてまで編集した映像は迫力と説得力にあふれ、放送時にも評判を呼んだ各作品の力を改めて強く印象づける。例えば「日本の素顔」シリーズの中の「三池～去るも地獄残るも地獄」（60年）「廃坑からの手紙」（64年）。「現代の映像」シリーズの「石船の海」（67年）、「新都市誕生」（63年）「八郎潟始末」（70年）、そして東北の出稼ぎ家庭の空洞化を告発して胸を衝く「村の女は眠れない」（70年）等々。衝撃度は今も変わらない。

森　まゆみさん

ゲストのお二人の話が具体的で示唆に富み、映像による〝追体験〟に一層の切実感を添えると、息苦しいほどの熱気が会場を掩う。森まゆみさんが「桜井マジックについ引き込まれてしまいましたね」と漏らして、会場の笑いと共感を誘う。確かに桜井さんの苦心の編集効果は大きく、映像が語る現実とゲストの体験談による指摘とで、70～80年代の高度成長や、その頓挫後の90年代とは日本にとって何であったのか、さまざまな問いと疑念が、苦い感慨を伴って沸き起こって来る。聴衆からの質疑にも重い真情がこもる。そして皆一様に、映像記録の訴求力と時代の記憶のアーカイブ再生の意味の大きさ、記憶を持続することの大切さを噛みしめたように感じられた。

水島久光さん

テレビによる情報発掘とも連動して、水島久光さんが「一般の人による地域の映像記録を集めて、地域の歴史や文化を互いに確認し合えるアーカイブの〝場〟作りを、今横浜でも企画している」と語り、それを受けて桜井さんが「地域にもそれぞれ独自の〝肖像権〟がある。それを大切にしようということだと思う。森さんの〝谷根千〟活動の思想も同じことでしょう」と要約したとき、出席者たちは深くうなづき、会場の雰囲気はなごんだ。この日の講座の、望ましい帰結だったといっていいだろう。

講座3回目への期待はふくらみ、参加者も更に増えるに違いない。

（記・鈴木典之）

人気番組メモリー

「世界ウルルン滞在記」

（95年4月～08年9月放送）
10年2月20日　横浜情文ホール
ゲスト　徳光和夫（司会）
山本耕史（滞在リポーター）
白井博、保坂秀司、石原徹
（テレビマンユニオン）
司会　大山勝美

テレビマンユニオン（毎日放送枠、TBS系列放送）の制作で人気を博したクイズ形式の滞在型ドキュメンタリー番組。タレント・ナビゲーターによる在来の物見遊山的な世界旅番組とは違い、起用したタレントが滞在する国の町や村に島の人々や部落にたたき込まれ悪戦苦闘する肉感的記録による意外性に満ちたドキュバラ〝という異色紀行番組。

ギター職人家に滞在して作ったギターを弾く山本耕史さん

制作上の約束事や段取りは一切ない。目的地に滞在する有名無名のタレントが言葉も習慣も分からないディスコミ状況の中でどうコミュニケーションをとるか。タレントは虚飾を剥がされ、人間性が試され、カメラ（制作者）が何を捉えるか。

さまざまなカルチャー・ショックの背景に浮かんでくる人間賛歌のドラマをクイズ形式で盛り上げる手法は、新しいタイプの知的娯楽情報番組として視聴者の共感を生んだ。会場はそんな熱いファンで満席になった。前後4回にわたり各地に滞在した「山本耕史」編の映像を枕に名番組の作られ方や裏話で会場は大いに沸いた。

白井　博さん

白井「奇異なカタカナ題名の根拠ですが、涙、涙の別れのシーンから後にCMで流行った点眼薬名と関係あるんじゃないか、と言われましたが、そうではなく、出会うのウ、泊まるのル、見るのル、体験のンを圧縮して題名にしたんです（笑い）」

山本「新宿生まれ新宿育ちの僕がいきなりミクロネシアの秘島の裸族との原始生活にほうり込まれる。大都会の生活との落差というか、カルチャー・ショックで」と言って「その他、中国手品集団に弟子入りでは60度の強い紛酒のカンペイ攻めにあい、スコットランドのバグパイプ演奏や米国編ではギター作りの職人の家で…」と映像に現れた前後4回担当した自分の姿に年齢の差を見つけ、役者としての成長の軌跡を感慨深げに語る。

白井「意外にテレビを見ていないのが業界人だが、日曜夜の放送だから見ている人が多い。出演する旅人は無名の新人が多い。演技じゃなく人間性が出るからコイツは使える、現地の人にうけてるアイツは誰だ？となる。「ウルルンに起用されることで注目され、オファーがある」と「徹子の部屋」とは違った評判で業界人気が出てきた。山本太郎などもウルルン先のハッスルぶりがきっかけで売り出したんじゃないか（笑い）」

徳光和夫さん

徳光「そろそろお別れシーンに〝泣きの徳光〟ともども茶の間もハンカチを用意する（笑い）。流れに反して、呆れる程の博識の石坂浩二さんが先を読んであれこれ披瀝しちゃう。気持ちはわかるが石坂サン、抑えてくださいって苦労しました」（笑い）

石原　徹さん

石原「毎回困るのは現地の人たちへの謝礼。山岳民族などに札束をやってもしょうがない。彼らは生きた豚が欲しいというからふもとに下り生豚を買ってきたり、撮影用の軽便発電機の便利さに目をつけられて、置いて行けという種族もいて、結局ブツを寄贈してきました（笑い）」

保坂「ご存知のように食事場面で昆虫やミミズ・トカゲなどがしばしば出てくる（笑い）。ところが意外に美人タレントに限ってムシャムシャかぶりつき、その結城は感動ものでした」

徳光「あの声でトカゲ食うかやホトトギス、と言うじゃない」（笑い）

保坂「いよいよお別れのシーンになるとタレントさんが、そして滞在先の家族が、コーディネーターが泣く。つられてカメラや音声まで総泣き。こんな現場はない。まるで毒にハマったような現場がしばしば。でもいつかまた、この毒を求めてもう一度やりたいなあって誘惑にかられているのです。いい番組でした」

保坂秀司さん

大山「なまじの予定調和的な作りはもう視聴者は見抜いている。といって涙の飛び道具で終わらせないサムシング・ニューが毎回あった。まさにテレビ番組の傑作シリーズでした」と結んだ。

（記　編集部）

大山勝美さん

阿武隈通信 最終回

秋山 豊寛

「パンカラ」考

町内の友人マサノリさんが「パンカラでついたコメ、食べませんか」と届けてくれました。早速、炊いてみました。確かに、粒が立つ感じで味わい深いのです。

「パンカラ」という言葉を聞いて、それが何だかわかる人は、極めて少ないでしょう。私が暮らしている阿武隈山中のローカル語のひとつだからです。

「ししおどし」みたいな装置といえば、「あれかな」と思う人はいるでしょう。京都の古いお寺の庭や、茶室などのある庭に設置されている「僧都」（添水）と同じ原理の装置です。

シーソーのように棒の中間に支点があり、一方の端に水を落とし、水がたまった重さで棒が傾き、水が落下すると軽くなった反動で、もう一方の端が何かを叩くという仕掛け。お寺の庭にあるのは、音を出して獣たちを驚かすことが狙いのようですが、「パンカラ」は、これを大型にした精米用の装置です。

水車の場合は、回転軸を上下運動に変換する必要がありますが、「パンカラ」の場合は、棒の端に杵と臼を設置して直接臼の中の玄米を精米します。

マサノリさんの話では、私の在所である福島県の滝根町では町内の各所に小さな流れがあることから、昭和二十年代のはじめ頃までは、この「パンカラ」による精米は珍しいものではなかったそうです。この地域は阿武隈高地の一番高い地域ということで、阿武隈川や夏井川に注ぐ様々な流れがあり、そこそこに小水力の豊かなところだったためでしょう。

「パンカラ」の精米能力は、十五キロの玄米を四日間で精米するというもので、私が実際に計ったところでは、杵が臼を搗くのは三十秒に一回というペース。大変ゆっくりとしています。

この非常にゆっくりとしたペースで米をつくことが重要なのだそうです。ローカルにお住まいの方は御存知と思いますが、地域によっては道端に「コイン精米機」が設置されています。これは、玄米を自分で精米する人（農家を含め）のためのもので、この「コイン精米機」で精米したてのコメは、かなり熱を持っています。精米、つまりコメの皮を削り取る過程で、摩擦熱が発生します。熱が発生することは、コメの質にかかわります。コメが劣化する可能性もあるのだそうです。

これに対して「パンカラ」米の場合、摩擦熱の発生が極めて小さく、そのため精米したコメは「生きて」いるのだそうです。

そんな「こだわり」は気にしないという方も少なくないと思いますが、たとえば、「カマド」で炊いたメシのほうが電気釜より美味しい、という方もいるわけです。コメの産地や研ぎ方、炊き方にこだわるなら、精米の方法までこだわっても良いような気もします。

今回「パンカラ」について書いておこうと思ったのは、別にコメの食べ方のこだわりについて云々したかったためではありません。

小水力の利用、という考え方です。

世の中、エコだの省エネだのと一種オマツリ騒ぎが、地球温暖化を材料にして続いていますが、正直いって、いずれも目前の景気刺激策。経済対策の一環でしかなく、日本の場合、家電業界、自動車業界、様々なメーカー救済のために税金を使っているだけでしょう。

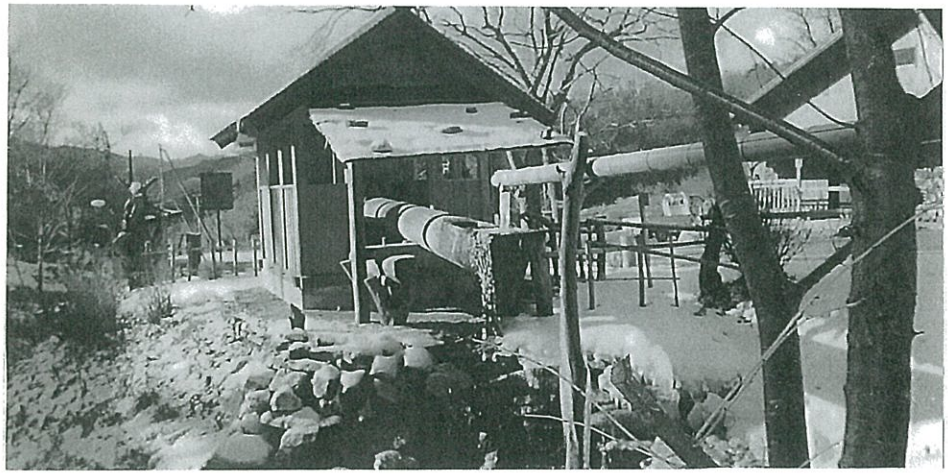
そもそも買い換え需要によってしか経済成長を維持できないシステムの、どこがエコなのか、ここはしっかり見定める必要はあります。

再生可能な自然エネルギー利用という点で優れているのは、小水力利用です。小生、岩手県の衣川村で、一年ほど「自然塾」なるものの塾長をしたことがあります。ここで、風力、太陽光、そして小型水力の三つの「再生可能エネルギー」なるものの比較をしたことがあります。その結果、一番コンスタントに電力を生産したのが、小型水力発電機でした。

食糧については、自給率がメディアで取り上げられることは時々あります。エネルギーの「自給」については、もう最初から「無理」と諦めているのか、あまり問題にされていないような気がします。しかし、大都市は別として、中山間地などを含め、ローカルでの「地域エネルギー自給」は、考えてみて良いテーマでしょう。現在すでに、長野県などのいくつかの自治体で、大きなダム建設による大水力発電ではなく、「小水力」による（一万キロワット以下）発電で、「地域エネルギー自給」への取り組みは始まっています。近年は補助金もつくようになりました。

極限の小水力利用である「パンカラ」には、残念ながら「補助金」はつきません。それに「パンカラ」精米機の生産性は「必要性を満たす上では充分」が前提ですから、必要のないモノまで「必要と思わせる」ことが前提である現代のリズムには合わないかもしれません。

しかし、私たちの暮らしのリズムが、このくらいゆっくりしたものになれば、私たちが受けるストレスも、はるかに少ないものになっていくのは確実です。



写真は秋山さんが紹介している精米用の「パンカラ」です。「棒の端に杵と臼を設置して玄米を精米します」

久野浩平さんを偲ぶ会

3月9日、春雪降りしきる渋谷は東急本店内のフレンチ・レストラン《タント・タント》に久野さんとご縁のあった人たちが70余人…。

近頃ではお通夜や親戚の法事のたぐいが目白押しで、まちがっても結婚式の招待はなく、そういえば定年退職者の「餞る会」や「励ます会」をはじめ、やっかみ半分で出席する受賞記念・出版記念で得意満面の主賓（生き仏）を「肴にする会」もめっきり減った。そのかわりといってはナンだが歳のせいなんだろう「偲ぶ会」がスケジュール表を埋める昨今…。

まずPDS代表取締役工藤英博さん（ATP理事長）が、PDS時代の面影を偲び、献杯ではじまり九州大学以来の友人水尾比呂志氏（詩人・美術史家）がラジオ九州時代に久野さんに起用されて書いた作品の数々に触れ、ラジオドラマに久野さんの本質があったと語る。ついで久野さんや河野宏さん（故人）などとテレビ朝日にドラマの流れを作ったテレ朝OBの田中利一さんが「ポーラ名作劇場」や「木曜ドラマ」枠の街シリーズなどに触れた。

それらのドラマ枠にセット美術の領域から仕事に係わった橋本潔さんに続き、中島丈博、鎌田敏夫両氏が公私にわたる交流のエピソードを、そして女優の山口果林さんが「安部公房スタジオ」の縁で久野組だった在りし頃を回想する…久野ドラマ奮闘史をたどる回想談は「放送人の会」における存在に行き着く。20人近い会員たちに野崎茂さんもまじり、会員時代の故人を偲んだ。

橋本潔さん

山口果林さんと今野勉さん

最後に「放送人の会」を代表して今野勉さんが「会報」の連載「放送人の証言」に尽力した晩年に触れる。

「久野さんは150人におよぶ放送界の先人たちのインタビュー取材に専念、録画テープを起こしてはテレビ史的な共通項を模索しては連載をまとめる作業をほぼ10年間も続けました。それまでのいわば芸術家肌で知られる久野さんのイメージとは違うパトスを感じとれる晩年の仕事はもっと注目されていいと感じています…」

会場の片隅に自然に集まった会員たちの席で、お開き間際に誰かが

「次の偲ぶ会は誰だろう？」と呟いて辺りを睨め回したら

「棺を蓋うて事定まる、と言う。右か左か、エライかバカか、評価定まらぬ生臭い連中の集まりだ。ま、せっかく長生きしましょうや」

もはや二次会でもあるまいと、三々五々、それぞれに降り止まぬ雪の街の闇に消えてゆくのでした。

春雪や語り足りない偲ぶ会　馬笑

（松尾　記）

左は久野さんの若い時代の写真。ドラマ「死ぬほど遭いたい」の撮影現場で、右端の無帽の人が久野さん。久野さんの長男・光太さんが探しだしてきてくださった。

「帰宅してまず何をしますか？」

☆一位 メールを読む。二位 留守電をチェックする。三位 クーラーをつける。四位 テレビをつける。五位 ペット（犬か猫）にエサをやる。☆某住宅会社の調査部が毎年試みる独身OL対象のアンケートだが、「会報」のコラム（03年14号）で五年前にも同じ回答を紹介していた。当時は一位テレビをつける。二位 冷蔵庫をあける。三位 部屋の窓をあける。四位 クーラーをオンにする。五位 留守電を聞くだった。☆もうお解りだろう。彼女たちのライフスタイルの激変である。7年前はワンルーム・マンションの主役だったテレビが凋落し、ラジオにいたっては近過去でも現在でも存在すらしていない。☆季節性もあり、いちがいには言えないが、外への関心や好奇心より内向きな、巣ごもり的な生活態度が透けてみえる。かつては大人は見てくれなくていい。F－1世代をねらえ！と大合唱し、《月9》をはじめ彼女たちに身近かなファッショナブル・ポイントをロケ先に選んだラブストーリーが乱立し消費文化を謳歌していた。☆今の連ドラは小・中学向けの〝バラドラ〟か、ナンセンス・アクションであり、第一F－1などというレッテルもいつのまにか消滅した☆娯楽のデパートといわれたテレビだが、そのデパートが今や総崩れだ。そういえば今のテレビのゴールデンアワーは、心なしか電器系大量販店ビルの狂騒に酷似していないか☆「あなたのテレビは見られなくなります」。それを言うなら「見るに値するテレビを創ります」だろう。（X）

第十九回放送人句会

◇平成二十二年三月十日（水）　◇於…赤坂・麦屋

◇選者…星野高士　◇出席…伊藤視郎、荻野慶人、豊田まつり、中島丈博、中村フミ、新村もとを、橋本きよし、林備後、堀川とんこう、松尾馬笑、森治美、横澤漂金、西川阿舟（十四名）

◇　兼題…春雷、蜆、本読み

【星野高士特選】

春雷や煮付けを崩す箸止まる　漂金（視、も、き）

本読みに主役二人が春の風邪　阿舟（◎慶、丈）

まあこんな日もそれでよし蜆汁　フミ（慶、漂、舟）

本読みのせりふ恥づかし窓の梅　丈博

それぞれの嶺伝ひ来る春の雷　備後（◎漂、と）

春雷に呼び止められし町はずれ　とんこう（◎治、も、漂）

春雷やその一閃に盃ゆれて　馬笑（視、備、漂）

本読室を梅の香黙って吹き抜ける　とんこう

【星野高士選】

読み合はせ妨ぐるなく春の雷　備後（と、舟）

読合せ巨匠の席に桜餅　もとを（馬）

春雷や両毛線は今不通　視郎（と）

春雷や寺島しのぶ銀熊賞　まつり

大御所の緩き本読み春の宵　もとを（フ、備、舟）

絵に描けば蜆しみじみ地味である　視郎（◎フ、舟）

廃屋に時が埋もれ春の雷　きよし（◎ま、も）

明日の身を知らず砂吐く蜆たち　慶人（馬）

春雷に自づと止める読合せ　もとを（き、馬）

本読みを終へればぼたん雪の街　フミ（ま、舟）

春雷や稚児たをやかに太刀かざす　きよし（と、治）

本読みも大団円や春の雷　もとを（◎視）

老犬の旅立ちて朝春の雷　フミ（備、治）

蜆売の声に笊もて駆け出しぬ　阿舟

湖風を逃げて茶店の蜆汁　備後（丈）

本読みの窓裏はせて春の雷　阿舟（漂）

茎立ちや本読み探り合ひつつも　まつり

御詠歌に現の夢の破らるる　丈博（治）

春の雷思はず肩を抱きけり　阿舟

―立松和平追悼―

春雷やふと「遠雷」のひと想う　馬笑（フ）

湖風に鋤簾重たし蜆掻　もとを

春雷やきしむ扉の異人館　きよし（慶）

【会員互選】

国産じゃないと蜆が泥を吐き　漂金（視、ま）

小さきを関取りも喰ふ蜆碗　丈博（視、き、と、馬、舟）

本読みの声かき消しし猫の恋　治美（視、慶、ま、フ）

天地の呟くがごと春の雷　備後（◎と、視、馬）

春雷や歩み変らぬ車椅子　漂金（◎馬、慶、フ）

春の雷聞えぬ妻に目立つしわ　馬笑（慶）

蜆の実探す目つきの愚痴話　馬笑（慶、フ、き）

蜆汁食ししみじみと幸せ　阿舟（ま）

丁寧に呑み干すだけの蜆汁　漂金（ま、馬、治）

雛檀は本読み粗く猿芝居　慶人（ま）

霧動きしじみ採る舟忽然と　とんこう（丈、も、漂）

別れなん思い断ち切る春の雷　治美（◎舟、丈）

ほっほっと蜆起きたり鍋の中　治美（丈、き）

春雷や明治の窓に町歪む　きよし（◎と、フ）

デパ地下の桶に生かさる蜆かな　治美（も）

かくれんぼ納戸の壁に蜆殻　馬笑（も）

付箋多き台本取り出す名老優　漂金（き）

見送りの駅に春雷と我残る　とんこう（◎き）

本読みの声も春めく一日かな　フミ（備）

ブルーマンデー朝餉の蜆まよひ箸　丈博（備）

しじみ汁婆がいた日の黒い鍋　とんこう（◎備）

一瞬の空気紫春の雷　視郎（と）

春雷に昏き家路や千鳥足　丈博（馬）

本読みの前に老優大嘘　視郎（治）

【選者　吟】　星野高士

本読みは続いてをりし春の雷　（漂）

本読みや春灯いつか暗さみせ　（丈）

比良颪比叡颪や蜆売り

量り売る蜆にひとつづつの顔　（◎丈）

春雷に浮かぶでもなく町の底　（治）

次回放送人句会

◇5月12日（水）6時半頃～（投句締切7時）5句

◇於…赤坂・麦屋（投句Fax03-3586-00569）

◇兼題…立夏、麦、カチンコ（夏の季語を入れて）

会員名簿

2010.03.19 現在

【あ】青木裕子 赤井朱美 秋田完 秋山豊寛 雨宮望 新井和子 有馬哲夫 石井彰 【い】石井清司 石井ふく子 石高健次 石橋冠 磯野恭子 磯村健二 市岡康子 一色伸夫 伊藤雅浩 井上良介 岩澤敏 【う】上田千秋 碓井広義 歌田勝彦 宇野昭 【え】江口展之 遠藤利男 遠藤ふき子 遠藤雅充 【お】大蔵雄之助 太田敬雄 大西康司 大西文一郎 大原れいこ 大山勝美 大類啓 大脇明 岡弘道 岡崎栄 岡田晋吉 緒方陽一 岡村黎明 小河原正巳 沖野瞭 荻野慶人 小田久榮門 織田晃之祐 【か】加賀美幸子 各務孝 片岡敬司 勝部領樹 加藤滋紀 加藤静夫 加藤辿 金沢敏子 兼歳正英 金平茂紀 加納孝夫 上安平洌子 鴨下信一 川口健一 川口幹夫 川竹和夫 河邑厚徳 河村正一 【き】岸田功 北川泰三 北川信 北出晃 北村美憲 北村充史 木村栄文 木村成忠 【く】楠美昌 工藤英博 隈部紀生 【こ】小池勝次郎 河野尚行 児玉清 児玉孝光 児玉久男 後藤和晃 小南武朗 近藤晋 今野勉 【さ】斉藤伸久 斉藤秀夫 斎明寺以玖子 酒井美樹男 寒河江正 坂元良江 桜井均 佐々木彰 佐々木欽三 佐藤秀山 佐藤利明 佐藤年 澤田隆治 沢田隆三 【し】重延浩 重村一 静永純一 嶋田親一 清水満 下重暁子 城菊子 【す】菅野高至 杉澤陽太郎 杉田成道 鈴木昭典 鈴木克明 鈴木典之 鈴木道明 須磨章 【せ】せんぽんよしこ 【そ】曽根英二 【た】高島秀之 高戸晨一 高橋一郎 高橋啓 滝大作 武本宏一 田澤正稔 田中昭男 田中直人 田原英二 田原茂行 【ち】千葉勉 【つ】露木茂 鶴橋康夫 【と】土居原作郎 堂本暁子 戸田佳太 外崎宏司 富永卓二 豊田由紀子 【な】中崎清栄 中澤忠正 中島僚 中田美知子 永田浩三 長沼士朗 永野敏一 中村敦夫 中村克史 中村季恵 中村耕治 中村敏夫 中村芙美子 中山和記 難波秀哉 【に】新村もとを 西ヶ谷秀夫 西川章 二宮文彦 丹羽美之 【の】信井文夫【は】萩野靖乃 橋本潔 林健嗣 林裕史 原由美子 原田庸之助 【ひ】備前島文夫 【ふ】深町幸男 藤井潔 藤井チズ子 藤田晋也 藤久ミネ 【ほ】星田良子 堀川とんこう 【ま】前川英樹 松井泰弘 松尾羊一 松平定知 松前洋一 松本明 松本修 松本国昭 【み】三上義智 水上毅 水野憲一 三村景一 三村千鶴 宮川鑛一 三宅恭次 明神正 【む】村上光一 村上雅通 村上佑二 村田亨 【も】守分寿男 諸橋毅一 【や】八木康夫 矢島良彰 薮内広之 山県昭彦 山崎隆保 山崎裕 山路家子 山田尚 山田良明 大和定次 山根基世 【よ】横沢彪 横山英治 吉澤保 吉永春子 吉村直樹 吉村光夫 【わ】和田智允 渡辺紘史

◎新年度です。新会員を募集中。おもいあたる「卒業生」を紹介ください。

◎皆さん、投票に参加しましょう！

なんだか総選挙みたいだが、放送人が選ぶグランプリは芸術祭のように立候補制（芸術祭参加）ではないし、有料のエントリー（自薦）制を加味するわけでもない。しわぶき一つ憚られるような環境で作品を無菌審査めいた態度で選ぶ長時間審査制でもない。交通整理的な意味で一応の審査体制はとるもののベースはあくまで「全会員が選ぶ賞」である。唯一の特色は、会員の皆さんの大半はいずれかの組織にかつて（今も）所属経験を持つ元現場の人々である。過去一年、ふと心に残った、笑った、泣いた…じっと胸に手をあてて考えて、そんなあなたの「時間」を思い出してみては。

前ページの「下馬評座談会」はあくまでお城登場門口での下馬評で、それはそれ、元現場が現場を視る独特な感性が問われる。現場の背景にこだわる姿勢で制作者像をうかびあがらせ、いわば目利きの目で「ほめる」手口の一端を公開したもの。貶すのは誰でも簡単にできるが「ほめる」は微妙だ。文脈によっては批評のレベルが試される。「あいつは甘い」「革新派ぶってるだけ」「お里が知れる」と厳しい。

「ほめる」ことのこわさだ。

＊参考までに座談会を笑覧していただければ幸甚です。（編集部）

編集後記

去年の花見は四ッ谷の土手桜だった。見渡せば昼間の花見には若者は少なく圧倒的にオジン・オバンだ。法政か上智か女子学生の群れがチラホラ遠慮しがちに通り去る。土手の入り口でパンフレットを配ってる。新道通りの飲み屋やらスーパーのチラシにまざって不動産屋に保険屋だっていた。テキは老人の桜見物を見こして標的にしたか。要介護保険などという文字が踊ってる。介護度5、4、3、2、1と並んだ数字に保険金の解説入りだ。

今は2が立てばオンの字だが、昔のラジオ全盛時代は5や4でトップ争いしたもんだ。聴取率の数字である。

パッと咲いてパッと散る儚い桜に介護保険のパンフレットが「悔悟保険」と読める。介護は悔悟か、いやな桜だ、いやな勧誘パンフめ！コップ酒が効いてきた。桜の小枝を振り振り歩く可愛い小学生に「オイ、桜折るバカ、梅折らぬバカといってな」と声をかけるがハテナ顔で無視されたっけ、去年は。さて、今年の開花はいつごろだろう。

ラジオの「スタンバイ！」で森田正光は3月22日説をとるが、ここへきてだいぶ怪しい。だって今年の四ッ谷土手にはまだ誰もいないじゃないか…

死支度致せ致せと桜かな

作家遠藤周作の遺作だが、こっちは死支度まだしたくない花見かな

昼酒がしみてきたようだ（松）